エッセイ

attributeと「持物」その他

水谷　智洋

1980年頃、ある百科事典のためにギリシア・ローマの神々の項目をかなりの数、つづったことがあります。そのために、古代地中海世界の宗教・神々に関する書物の他に、和洋の神話辞典、古代学辞典のたぐいを多数参照しましたが、和書の方で、一つの見なれない日本語にしばしば遭遇しました。それは、一例をあげれば、「この神の持物としては、弓矢、竪琴（リラ）、ゲッケイジュ、オオカミが有名...」（『国民百科事典』（平凡社）、第1巻、1976、176頁、辻村誠三氏執筆の「アポロン」の項）に見られる「持物」という語です。この日本語は、むろん、また一例をあげれば、'Apollo's many attributes indicate the wide variety of his patronage and functions: the BOW, ARROW and QUIVER, ... The LYRE .... A crown of LAUREL leaves, ... As a sun-god he drives a four-horse CHARIOT and may have a HALO. A SNAKE .... Other less common attributes are his shepherd's CROOK, ...; the SWAN, ...; a GLOBE, ...; a WOLF, ...'（J.Hall, *Dictionary of Subjects and Symbols in Art*, rev.ed., London, 1979, p.26, s.v. Apollo）に現れるattributeに対応するものでありましょう。

試みに、手元の研究社の『新英和大辞典』（第5版, 1980）を引いてみますと、名詞としてのattributeの項には、「2a（官職・資格などの表象となる）付きもの、持物（symbol）: The eagle was the ～ of Jupiter.／A crown and scepter are ～s of kings.冠と笏（しゃく）とは王の表象［王に付きもの］である. b〈美術〉（表現された人物の性格を特徴づける）きまった持物.」とあります。けれども、ここに2度出る「持物」は何と読むのでしょうか。「じぶつ」でしょうか、それとも、読者に送り仮名を補わせて、「もちもの」と読ませたいのでしょうか[1]。また、それは辻村氏の文章に出る「持物」とどんな関係にあるのでしょうか。同じのようにも、微妙に違うようにも思われます。なんとも判断のつきかねる

このことばは、結局、私の採用するところとはなりませんでした。

具体的には、'The attribute of Asclepius was the snake,' (P.Harvey, *The Oxford Companion to Classical Literature*, 1937. p.53, s.v. Asclepius) とあるようなところは、「彼の聖獣は蛇で...」(『大百科事典』(平凡社)、第1巻、1984、241頁、「アスクレピオス」の項) としました。また、'His (=Zeus') attributes are the sceptre, eagle, thunderbolt and a figure of Victory in his hand, and sometimes also a cornucopia.' (J.Warrington, *Everyman's Classical Dictionary*, 3rd ed. rev., 1969, p.537, s.v. Zeus) のようなところは、「それ (=ペイディアース作のオリュンピアのゼウス神殿の本尊) は金と象牙に飾られたゼウスの座像で、オリーブの冠をいただき、右手には勝利の女神ニケを捧げ、左手には彼の聖鳥たる鷲が止まった王笏を執って、あたかも神そのものを目にする想いを抱かせたと伝えられるが、現存しない. 聖木はオーク.」(同上、第8巻、1985、467頁、「ゼウス」の項) [2]と、古代人の報告を借用した記述で対応させたりして、百科事典の記事を書き終えたのです。

それから約10年後のことです。あるパーティーで、上野の博物館にお勤めで仏教美術の専門家という男性とことばを交わす機会がありました。そのとき私は話のついでに、10年近く頭の隅にもやもやとしたままで残っていた「持物」を話題にのぼせ、もしかしてなにか御存知ですか、と尋ねてみました。かねがね、なにやら抹香臭い感じのことば、という印象を抱いていたからです。答えは、やはり (と言うべきでしょうか)、仏教美術の用語とのこと。ただし、「じもつ」と読む由。この読み方は意想外でした。私はうかつにも、「物」を「もつ」と読むことなど、全然、想定していなかったのです。

けれども、自分のより一層のうかつさ加減を思い知らされたのは、その晩、自宅で古い『広辞苑』(岩波書店、1955) を開いたときでした。専門家に教えられた通り、確かに見出し語「じもつ」があります。が、驚きは、「じ・もつ　ヂ・《持物》〔仏〕仏像の手に持っているもの。薬師の藤壺、観音の水瓶、力士の金剛杵 (こんごうしょ) のように、仏像の性格を示す標識として重要。じぶつ。」と、末尾に「じぶつ」という読み方があることが明記され、「じぶつ」もまた見出し語 (「じ-ぶつ　ヂ・《持物》〔仏〕⇒じもつ」という空見出し) に採録されていることでした[3]。なんのことはない、最初から『広辞苑』で「じぶつ」と引いてさえいたら、私は容易に「じもつ」にたどりつけていた筈なのです。そして多少なりとも、頭を悩ます度合いが減っていたに違いないのです。なぜそうならなかったのか、今ではよく分かりませんが、たぶん、はじめに漢和辞典に

あたって「持物」が見つからなかったため、あっさりあきらめてしまったのでしょう。

それからまた時は流れ、今年（2002年）のある日のこと。私はちょっとした必要からcornucopiaの図像 ── それも望むらくは古代の ── をさがしていましたので、なにかの手がかりが得られるかもしれないと、某所の書棚にあった『新潮世界美術辞典』（1985）の「コルヌコピア」の項を開いてみました。すると、「この呼称は、ローマの「豊饒」」の女神コーピア（Copia）の持物（したがってコルヌー・コーピアエ〔cornu Copiae，コーピアの角の意〕と呼ばれた）であったことに由来する。」（557頁）との一文があり、思いがけず、ルビ付きの「持物」にぶつかりました。この分では他にもあるかもしれないと、頁を繰ってみますと、「アフロディーテー」の項にも同じくルビ付きで、「持物標識はミルト、ざくら、りんご、鳩、白鳥、兎、牡山羊などである。」（42頁）が見つかりました。こうした幸運（？）は続くものらしく、その美術辞典の近くにあったので、なにげなく手にした三浦篤『まなざしのレッスン　1　西洋伝統絵画』（東京大学出版会、2001）からも、「ルーベンスの《パリスの審判》」中の「3人の女神の区別」を「工夫する必要」から「活用されたのが、アトリビュート（持物、象徴物）と呼ばれるモチーフです.」（21頁）が目に入りました[4]。また、念のためのぞいてみた研究社の『新英和大辞典』の第6版（2002年3月刊で、某所に届いたばかりでした）のattributeの項では、別種の発見もしました。第5版（先に引用しました）と比べると、「持物」に送り仮名が入って「持ち物」になっていたのです。

「持物」は久しく私の関心の対象外にありました。なぜなら私は、百科事典の仕事がすんでからというもの、その種のことばが現れるような文章を熟読したり、自分でもつづったりすることがなかったからです。けれども、このとき、仏教美術以外の分野での用例が、思いがけず、一度に3例も私の目にとび込んできたのを機に、あらためて考え直してみました。もし20数年前、私になにがしかの知識があったなら、はたして私は百科事典の記事に「持物」を用いただろうか、と。

答えは、やはり、否定的です。『新潮世界美術辞典』の「契印（かいいん）」の項には、「手印に対して仏教諸尊の持つ持物をいう。諸尊の本誓（過去世に立てた誓願）を物の形で象徴的に示す標幟。」（256頁）とあります。一方、*OED*の名詞としてのattributeの項には、'3 A material object recognized as

appropriate to, and thus symbolic of, any office or actor : *spec.* in *Painting, Sculpture* : A conventional symbol added, as an accessory, to denote the character or show the identity of the personage represented.' (2nd ed., Vol.I, 1989) とあります。それでは、例えば、*OED* が用例の 3 番目に掲げる'The Club is an attribute of Hercules.'の attribute は「持物」でよいでしょうか。神話伝説や美術作品で数々の功業をなしとげる様が語られ、描かれるときのヘーラクレースは生身の人間の筈ですが、彼はその死後、神々の列に加えられたとされ、また実際にも、人々を災禍から守ってくれる神として広く崇拝されていましたから、「諸尊」の仲間に入れられましょう。では肝心の棍棒はといえば、それが「過去世に立てた誓願」の象徴とまで解されるかは不明確ですが、「性格を示す標識」には違いありません。とすれば、「棍棒はヘーラクレースの持物である。」も、ひとまず許容範囲内にありましょう。では、パリスについてはどうでしょう。ピロクテーテースの弓に射られて死んだという彼の神格化の話は聞きませんし、「諸尊」と崇められるような人物とも思われません。したがって、'It (= the Phrygian bonnet) is especially the attribute of PARIS.' (Hall, *op.cit.*, p.145, s.v. Hat) の attribute に「持物」は、少くとも私の考えでは、適語ではありません。

ここでもう一度、三浦氏に登場を願いますと、氏は先程の文章につづけてこう記述しています。「それ（＝アトリビュート）はある特定の人物を確かにその人物であると明示するための付随的要素であり、人物が実際に持っている物であったり、その近くに置かれた生き物や静物であったりします．たとえば、パリスの場合は羊飼いなので、先が鉤形に曲がった羊飼いの杖を持つとともに、足の間に牧羊犬が、少し後方に羊たちが見えるわけで、これらはパリス本人というよりも、一般に羊飼いとしての自然なアトリビュートと言えるでしょう．黄金の林檎を手にしていることで、単なる羊飼いではなくてパリスとわかります．」(21 頁)　そうなのです、「持物」が（仏像・仏教諸尊あるいは神的存在が）「手に持っているもの」でなければならないのに対して、attribute は、「人物が実際に持っている物」である必要はなく、「その近くに置かれた生き物や静物」でもよいのです。また、その人物は、必ずしも神でなくてもよいのです。ですから、ギリシア・ローマの神話伝説や美術作品に関する文章中の attribute は、つねに「持物」一語で置き換えることは不可能と言わざるを得ません。とすれば、三浦氏のように、「アトリビュート」というカタカナ語ですませるか[5]、あるいは時と場合に応じて、象徴、表象、標識などとともに使い分けるか、またあるいは、まったく別種の表現を案出する他はないという平凡な結論に落ち着

きます。ただし、この結論は、「持物」が、多くの人々にとって、「じもつ」あるいは「じぶつ」の読み方とある程度の意味内容が知られた用語であるとの前提に立っていますから、その前提が ── これは自らの無知を尺度にした不確かな判断でしかありませんが ── 相当に疑わしい以上、結論もまた、同じ程度に疑わしいものにとどまります。

最後に、研究社の『新英和大辞典』第 6 版に現れた「持ち物」について一言すれば、それは仏語の「持物」とは無関係のことばでしょうから、「持ち物」の所有者が神的存在でない場合にも使えるという利点がある反面、対象が「生き物」の場合には、そぐわない印象を与えることもありましょう。しかしながら、「官職・資格などの表象となる」や「表現された人物の性格を特徴づける決まった」など、なんらかの修飾語を付け加えれば、attribute に対応する日本語として働かせられる場合も少なくないように思われます。

注

1) この英和辞典には、「持ち合わせ」(s.v. have *vt.*1)、「持ち分」(s.v. share *n.*1b)、「持ち高」(s.v. position *n.*10)、「持ち家」(s.v. own *adj.*1)、「持家住まい」(s.v. owner occupation)、「持主」(s.v. owner 1) などの表記が見られ、「持物」の読み方の判断を困難にしています。

2) この百科事典は、1988 年に『世界大百科事典』と改称され、巻数もふえました。そのため、「ゼウス」の項は第 15 巻に移っていますが、頁数は同じです。

3) 『日本国語大辞典』(小学館、初版、1974, 第 2 版、2001) にも、本見出しに「じもつ」、空見出しに「じぶつ」があります。ただし、「じぶつ」と読むのが確実な用例は掲げられていません。なお、『新潮世界美術辞典』には「じぶつ」は見出されません。

4) 『小学館ランダムハウス英和大辞典』(初版、1973、第 2 版、1994) の名詞としての attribute の項には、美術用語として「アットリビュト」なるカタカナ語が記載されています。その一方、読み方の如何を問わず、「持物」は同項のどこにも現れません。なお、美術用語としての「アットリビュト」ないし「アトリビュート」がいつ頃から用いられ始めたかは、調査していません。

5) 三浦氏は同書 21 頁以下の「ギリシアの神々とアトリビュート」の項で、ゼウス、ヘラ、アテナ、ヴィーナス、エロス、アポロン (神名の表記は同氏のもの) についてそれぞれの「アトリビュート」を説明しています。